特集──メセナアワード2010

MÉCÉNAT AWARDS 2010

企業メセナの専門情報誌

メセナnote

Winter 2010

67

Mécénat 20th

【特集】

メセナアワード2010

7つの受賞活動が決定

優れたメセナ活動を行った企業や団体を表彰する「メセナアワード」。4月初旬から5月末まで自薦・他薦により案件を募集し、今年は126件（113社・団体）のご応募をいただきました。10月の審査会にて、メセナ大賞部門、文化庁長官賞部門で7つの受賞活動が決まりました。

メセナアワード2010贈呈式

12月3日（金）東商ホール（東京・丸の内）にて

◎受賞企業には、表彰状とトロフィーを贈呈します。

◎受賞企業・団体トップ、審査委員が出席。

◎贈呈式の様子は、Ustream（mecenat 2010で検索）でご覧いただけます。

審査委員

逢坂恵理子
横浜美術館館長

木下直之
文化資源学、東京大学教授

小沼純一
音楽・文芸批評、音楽文化論、早稲田大学文学学術院教授

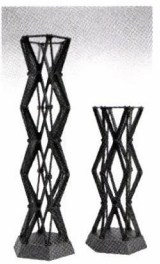
白石美雪
音楽評論、音楽学、武蔵野美術大学教授

扇田昭彦
演劇評論家

中谷巌
三菱UFJリサーチ&コンサルティング理事長、不識塾塾長

鷲田清一
哲学者、大阪大学総長

福地茂雄
企業メセナ協議会理事長



塔―tower 2010
アルミニウムに着色
h513/353×w140×d161mm

［メセナ大賞部門］トロフィー制作　佐藤好彦

1993年、東京芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。現代人の生活に無意識に溶け込んでいる大量生産された製品を素材に、「伸ばす」「増殖する」などのアレンジによって、そこに潜む機能や形態のエネルギーを増幅させた彫刻を制作。「キリン・アート・アワード2002」にて最優秀作品賞。05年「第6回SICFスパイラル・インディペンデント・クリエーターズ・フェスティバル」にて準グランプリ受賞。

制作コンセプト：芸術文化は人々の表現活動によって成長する塔のようなもの。その塔からは遠い世界を見渡すことができ、皆が共有する財産であり、象徴であり続けます。どれほど政治、経済が発展しても、この塔が機能しなければ人々の暮らしは決して豊かとはいえないでしょう。

今年のテーマカラー：GREENは「自然力」を意味し、芸術文化が地球環境と密接な関係のうえに成り立っており、メセナが植物のように力強く伸びゆくことをイメージしています。

※「メセナ大賞部門」のトロフィー制作にあたっては、［株］アコールアートセンターにご協力をいただきました。

● メセナ大賞

「世界遺産 石見銀山」における企業経営と地域貢献

中村ブレイス（株）

島根県石見地方、大森の地を中心に石見銀山の鉱脈は広がる。江戸初期には世界の銀産量の約3割を占め、20万もの人で栄えた大森町だが、大正12年の休山以降人口は激減、現在は５００人にも満たない。

義肢装具の製作を行う中村ブレイスは１９７４年、大森出身の中村俊郎氏が京都とカリフォルニア州での研修を経て帰郷し、ただ一人で自宅前の納屋で創業した。新素材技術で義肢装具や医療器具を次々と研究開発し、特にシリコーンゴム製の手指、人工乳房などは「メディカルアート」と称して、一人ひとりの特徴に合わせたリアルで美しい仕上がりで国内外に知られる。

中村氏は社業の傍ら、大森の活性化に尽力する。古い民家を改修して社宅などに活用するほか、飲食店など店舗に貸与、これまでに35軒の空き家が蘇り、大森の伝統的な町並みを保ってきた。元酒蔵はメディカルアート研究所の工房とし、取り壊し予定だった明治期の銀行を移設して「なかむら館」を開設。同館で展示されているのが、25年にわたり収集してきた石見銀山に関連する資料約１００点である。県外・国外に流出していた希少な絵巻や書籍、石見銀でつくられた古丁銀など、銀山の歴史的重要性を証明する資料の数々は２００７年の世界遺産登録に大きな役割を果たした。

ほかにも、夏休み期間に海外の子どもを受け入れる「なかむらスカラシップ」や、銀山に関する研究や文化活動を表彰する「石見銀山文化賞」の創設、大森代官所跡リニューアルなど地元への貢献は著しい。大森から世界へ――社業においてもメセナ活動でも、独自の価値を発信して多くの人を惹きつけている。

07年にリニューアルした石見銀山資料館

企業プロフィール（２０１０年3月現在）
● 本社所在地：島根県大田市 ● 資本金：２０００万円
● 業種：義肢装具・人工乳房・医療用具 ● 設立年：１９８２年
● 従業員数：70人 ● ＵＲＬ：nakamura-brace.co.jp

● 音もてなし賞

「リレー音楽祭 in アトリウム」の実施

京都ブライトンホテル（株）

京都ブライトンホテルは、長谷工コーポレーションのホテル事業一号店として１９８８年に開設した。客室数１８２室、京都御所や二条城に近く、立地と景観のよさ、定評あるサービスが人気だ。

このホテルのアトリウムで、夏の恒例として定着しているのが「リレー音楽祭 in アトリウム」である。京都市交響楽団の音楽監督で常任指揮者の井上道義氏と相談し96年にスタート、近年は7月の一ヶ月間にわたり、毎晩20時から30分間のコンサートが行われている。約30ｍ四方のアトリウムは、20ｍある吹き抜け天井が特徴的で音の響きがよく、各階の客室をつなぐ回廊が囲む構造となっており、部屋の扉を開けると音楽が流れ込んでくる。宿泊客はもとより、コンサート目当てに通う近隣住民もいて、夏のホテルは音楽祭の会場として連日にぎわう。

夜毎 異なるプログラムが催されるアトリウムロビー

出演者は京都を活動拠点とする団体や音楽家が多く、公募とともに各団体からの推薦を受けて選出される。各年のテーマやプログラム内容は、井上氏を長とする実行委員会で検討され、「ホ、ホ、ホテル来い」や「不響は終わりだ！」などユニークなテーマのもと、ソプラノの中丸三千繪やピアノの熊本マリといったソリストから、カルテットやアンサンブル、京響はじめ各団体の枠を超えたユニットが登場。クラシック音楽を中心になじみ深い唱歌やトークを交えたり、アトリウムならではの演出を試みるなど、出演者にとっても通常とは異なる編成やチャレンジの場となっている。

15年で５９３夜のリレーを続けてきた音楽祭。京都の風物詩としてさらに、暑い夏の夜を彩っていく。

企業プロフィール（２０１０年３月現在）
- 本社所在地：京都府京都市 ● 資本金：３０００万円 ● 業種：サービス
- 設立年：１９８８年 ● 従業員数：３３７人
- ＵＲＬ：www.brightonhotels.co.jp/kyoto/hotelevent/ongakusai/

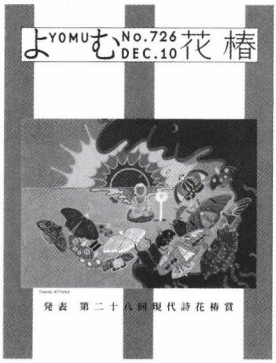
ことばの花賞

「現代詩花椿賞」による詩の支援と振興

（株）資生堂

資生堂の企業文化誌として70年以上の歴史を持つ『花椿』。ファッションやデザイン、アートに関心の高い読者に支持されている同誌で、「美を伝えることばの力を高めたい」との想いで1983年に創設されたのが「現代詩花椿賞」である。

それ以前も一般公募で詩を掲載する企画を行っていたが、専門的に詩に携わる人を対象とする懸賞事業とした。自費出版も含めて、前年度に発行された詩集の中から最も優れた作品に対して賞を贈る。選考委員は4人の詩人が務め、4年の任期で毎年1人ずつ入れ替わる仕組みで、それぞれが数冊ずつ詩集を推薦し、徹底的な討議のうえ一冊の作品を選んでいく。これまでの受賞者は吉増剛造や谷川俊太郎、新川和江らキャリア豊富な詩人から、主婦や会社員、教職の傍ら詩作を続けてきたという新人まで幅広く、その時々で優れた作品に注目する点こそが同賞の特徴といえる。



受賞作品が掲載される12月号

受賞者には社内デザイナーが特別に手がけた香水瓶と副賞100万円が授与され、受賞作品は『よむ花椿』12月号に掲載される。すでに28回を数え、現在では出版社や特定の詩壇のグループに属さない賞として認知されており、他の賞を辞退した詩人にも「花椿賞なら喜んでいただきたい」といわれるほど、独自性の高さを確立してきた。

近年は、受賞者や選考委員による対談など「ことばの美」について語り合う場を設けており、『花椿』読者にも好評で、毎回多くの参加者が集う。現代詩という分野に光をあて、美しいことばの花を咲かせてきたのである。

企業プロフィール（2010年3月現在）
- 本社所在地：東京都中央区 ● 資本金：645億円 ● 業種：化学
- 設立年：1872年 ● 従業員数：2万8968人（グループ）
- URL：www.shiseido.co.jp/hanatsubaki/

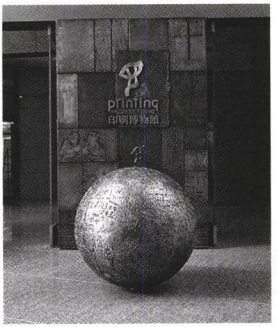
● 印刷文化振興賞

印刷博物館の運営

凸版印刷（株）

印刷博物館は、凸版印刷の創立100周年にあたる2000年、東京・小石川工場跡地に建てられた社屋の地階と1階に開設された。コミュニケーションメディアとしての印刷が社会や歴史に果たしてきた役割に着目し、「印刷文化学」を築くべく、資料収集と調査研究、展覧会、教育普及活動などに取り組む。

収蔵品はポスター、チラシ、書籍など印刷物のほか、活字や版木、フィルム、機械類で約6万点を超える。徳川家康がつくらせた駿河版銅活字（重要文化財）や、奈良時代の百万塔陀羅尼、グーテンベルクの『42行聖書』原葉などの貴重な資料の公開に加え、デジタル画像での資料閲覧やレプリカで理解を深める展示もある。



印刷博物館エントランス

企画展では「ヴァチカン教皇庁図書館展」や「プランタン＝モレトゥス博物館展」など、日本初公開となる作品や資料を多数展示し、その後も交流・協力を続け、相互に印刷文化を紹介している。また「引札」「ポスター」「活字」「プレス機」といった印刷独自のテーマを掘り下げた企画展は、メディアやデザインなど関連領域で仕事をする人や学生等の関心を集める。

さらに本展示場には、活版印刷体験ができる「印刷の家」がある。同社OBの指導により創作活動やワークショップが行われ、近隣小学校の利用が定着しているほか、全国の博物館や図書館にも出張して教育普及活動への協力を惜しまない。08年には多数の企業系ミュージアムとともに産業文化博物館コンソーシアムを立ち上げ、産業が培ってきた技術や文化面での貢献を探る試みも始めた。開館以来10年、着実で専門性の高い活動を続け、印刷文化の振興に努めてきたのである。

企業プロフィール（2010年3月現在）
● 本社所在地：東京都千代田区 ● 資本金：1049億8600万円
● 業種：総合印刷 ● 設立年：1900年 ● 従業員数：4万7650人（連結）
● URL：www.toppan.co.jp ｜ www.printing-museum.org

写真家ニコリ賞
―写真文化とともに歩む―ニコンサロンの運営と活動

（株）ニコン

1968年、ニコンの設立50周年を記念して銀座ニコンサロンは開設された。オープニング企画は「木村伊兵衛の眼」。71年に新宿、74年には大阪にも開設して、以来一貫して写真家に発表の場を提供してきた。

出展者は公募により、プロ・アマ、国籍、使用機材を問わず、40点以上の作品からなるポートフォリオで選ばれる。歴代の選考委員は木村伊兵衛、土門拳など日本を代表する写真家が務め、近年は土田ヒロミ、大島洋のほか美術評論家の伊藤俊治など多彩な顔ぶれである。作品のレベルのみを基準に選ばれた出展者は、ニコンサロンで1～2週間の展示を行い、年間で最も優れた写真展に「伊奈信男賞」としてトロフィーと賞金100万円、ニコンの最高級デジタルカメラが贈られる。

新宿ニコンサロンでの「ポートフォリオレビュー」

98年からは35歳以下を対象とする「Juna21」をスタート。ギャラリートークや「ポートフォリオレビュー」として選考委員と意見交換ができる場を設けるなど、若い人たちを励ましている。また「Juna21」でも年度賞「三木淳賞」を設けており、受賞者は2年の間に再度写真展を行う機会が与えられる。

さらに、機を捉えて企画展を開催するほか、活躍中の写真家を招いてのフォトセミナーやトークショーも実施。40年を超える歩みの中で行われた写真展は銀座だけでも1700回を数える。「ニコンサロンでやらなければ一流ではない」とその評価は国内外で高く、発表後に他の写真賞を受賞する写真家も少なくない。写真表現を真摯に追求する人たちが目指す場として、今後も変わらぬ活動を続けていくことだろう。

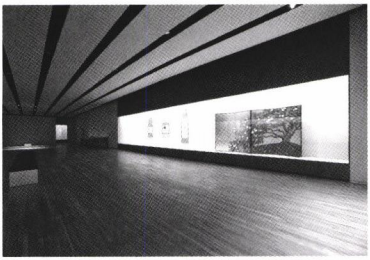
企業プロフィール（2010年3月現在）
- 本社所在地：東京都千代田区 ● 資本金：654億7500万円
- 業種：精密機器 ● 設立年：1917年 ● 従業員数：2万6125人（連結）
- URL：www.nikon-image.com/activity/salon/

● 日本画応援賞

山種美術館の運営

（財）山種美術財団

山種美術館は１９６６年、山種証券の創設者である山﨑種二氏が蒐集した日本画を公開することを目的に、日本橋兜町に開設された。「絵は人柄である」との理念のもと、横山大観や上村松園、川合玉堂ら当時活躍中の作家と直接交流を深めながら作品を集め、美術館を建てるに際しては、横山大観や小林古径らから大切にしていた作品を譲り受けた。その後も東山魁夷らに作品制作を依頼したり、旧安宅コレクションの速水御舟作品１０５点を一括購入するなど、明治以降の近代・現代日本画のコレクション内容を充実させてきた。



展示室内観　©Norio Koike 2009

さらに、若手画家の育成を目的として、71年から97年まで隔年で「山種美術館賞」を実施。受賞作品を買い上げて新たな才能を紹介してきた。こうして所蔵作品は現在約１８００点にのぼり、年間6～7本の展覧会を開催して日本画ファンに親しまれている。

98年、施設の老朽化に伴って千鳥ヶ淵に仮移転、さらに２００９年10月に、広尾に新設オープンした。設計にあたっては、屏風や掛け軸、巻物などの作品鑑賞に最適な照明や展示ケースを工夫し、鑑賞希望が多い作品を定期的に公開するスペースを設け、バリアフリーにも配慮した。開設以来、以前にも増して多くの来館者を数え、高齢者や福祉施設からの団体鑑賞も受け入れている。

また、教育普及活動にも積極的に取り組む。企画展にあわせたギャラリートークのほか、近隣の小学校から大学まで教育機関と連携しての特別鑑賞会や講座なども行っている。今後も日本画専門の美術館として、より幅広い人々にその魅力を発信していくことだろう。

団体プロフィール（２０１０年３月現在）
● 所在地：東京都渋谷区 ● 基本財産：69億２３５０万円
● 業種：財団 ● 設立年：１９６６年 ● 従業員数：７人
● ＵＲＬ：www.yamatane-museum.or.jp

● 文化庁長官賞

音楽による次世代育成の多角的活動
―TOA Meet! Music! Concept―

TOA（株）

神戸・ポートアイランドに本社を置く音響メーカーのTOAは、グループ会社であるジーベックとともに、自社ホール「XEBEC HALL」を拠点に音楽を中心としたメセナ活動を展開する。98年からは、近隣中学校2年生を対象とした職場体験制度「トライやる・ウィーク」で、一週間で生徒とアーティストが音楽作品を共同創作し、住民向けのコンサートを開催する企画を毎年実施しており、地域の行事として定着してきた。

「トライやる・ウィーク2010」コンサートの様子

この企画を含め、音楽と教育に関する複数の活動を集約したのが「TOA Meet! Music! Concept」である。子どもの成長過程にあわせた4つの音楽体験プログラムと保護者の意識調査を組み合わせた複合プロジェクトで、小中学生が対象の「TOA Music Workshop」では、音楽との出会いや仲間とともに参加する楽しさを知り、中学生は「トライやる・ウィークシリーズ」で音楽を創る喜びを味わう。「神戸JAZZ」では、中高生が出演者やスタッフと連携してコンサートを制作。専門学校・大学生には「匠ワークショップ」としてプロの技を伝え、明日の音楽の担い手を育成している。

さらに親世代には「TOA音楽と教育の意識調査」で教育における音楽の役割を認識させるアンケートを行う。結果を公表し次世代育成活動の必要性を訴えるとともに、企画立案や内容の充実に役立てている。

自らが持つホールやスタッフの技術・スキルを活かし、NPO、教育機関とも連携して運営される多角的なプログラムを通じて、多くの子どもたちの表現力や創造性を高めてきた。地域ぐるみの次世代育成に、TOAのメセナ活動が欠かせない存在となったのである。

企業プロフィール（2010年3月現在）
- 本社所在地：兵庫県神戸市 ● 資本金：52億8000万円
- 業種：電気機器 ● 設立年：1934年 ● 従業員数：2710人（連結）
- URL：www.toa.co.jp/mecenat/

トップ・インタビュー

石見銀山の歴史・文化が育む夢を次代につなぐ

中村俊郎　中村ブレイス(株)　代表取締役

メセナ大賞の受賞、誠におめでとうございます。民家を改修してのまち並み保存や、石見銀山に関連する資料収集など長年にわたる地域貢献が高く評価されました。

とても立派な賞をいただき、ありがとうございます。決定の一報が入りました時には、「メセナ大賞とは本当でしょうか?」と逆にお尋ねしたほどでした。

1974年12月20日、中村ブレイスの看板を大森の自宅前の納屋を改装した10坪の工房に掲げました。カリフォルニアで義肢装具を学び、帰国して3ヶ月後のスタートでした。社員もお金もお客もなく、私ただ一人で、工房には道具すら十分にありませんでしたが、生まれ故郷に元気で帰り、自分の工房が持てる喜びと希望に燃えていました。

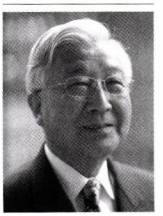
もう半世紀も前、私が12~13才のころに、明治生まれの父は「俊郎や、この石見銀山はマルコ・ポーロをあわせて考えるとおもしろいぞ!」とこたつにあたりながら語ってくれました。ゴーストタウンになりそうなまちで夢を語ってくれる父親から、いつしか私は広い世界を見ることを教えられたのです。かつて世界の人々が求めた銀があり繁栄があった、その深い歴史や文化は何よりのお宝です。そこで夢を大切に、一歩一歩あわてることなく、この地から若者を育てるのだと自分に言い聞かせました。

今、石見銀山の入口の代官所跡の一角に社屋を持っています。一品受注製作の義肢装具ですが、創業して10年後からは日本国内と海外にも製品を出荷できるようになりました。

石見銀山の世界遺産登録に努め、「なかむらスカラシップ」を通じて、世界に大森の魅力を伝えておられます。

98年から2006年の8年間、当時の島根県澄田信義知事から県の教育委員に任命され、後半の5年間は教育委員長の責務を負いました。知事は93年より、石見銀山を世界遺産に登録しようと尽力していました。ちょうど50代にさしかかる仕事も大切な時期でしたが、自分にとってもうれしいことでしたし、少年少女に夢を語るのも仕事と思い、私のすべてをかけようと思いました。石見銀山の世界遺産登録に向けて、教育委員会での旗振り役として夢中になったのは当然のことでした。そして、ユネスコ大使、国、県、市民すべての人々のお力添えで、07年にはニュージーランドのクライストチャーチで、奇跡的ともいわれた世界遺産登録が実現できたのです。

時折私は、自分の青春をつくってくれたアメリカ留学時代をとてもありがたく思い起こします。そこで20年前から毎夏、米国メイン州の中学・高校生の音楽祭での優勝者を古い日本家屋のわが家に招いています。妻も協力してくれ、独自の「なかむらスカラシップ」を創設しました。声楽、ピアノ、フルートなどの音楽大使が来日し、静かな石見銀山のまちで夏休みを過ごし、学校体験もしながら地元の子どもたちと音楽交流をするのです。エミリーという子は13才の滞在を機に日本語を勉強したいと金沢大学に留学し、



なかむら・としろう
1948生まれ。66年京都市大井義肢製作所入社。72年米国カリフォルニア州、モダンオーソペディク社に研修入社、UCLAメディカルスクールなどで学び、米国装具士補に認定される。趣味は石見銀山に関する国内外の古地図・古貨幣・古典書の収集と、地元高校野球の応援。

その後4年間は青森で外国語指導助手を務めて、中村家の気のおけない娘となりました。ほかにも、このまちを訪れた子は皆、私たち夫婦を「お父さん、お母さん」と慕ってくれ、世界の各地で石見銀山の世界遺産登録を心から喜んでくれました。

次代を担う人たちに夢をつなぐこともメセナ、とのお考えです。

中村ブレイスの社是は「Think」です。思いがけず怪我や病気で手足や乳房を失った人々がリハビリ訓練を行う、その方への医療用具の製作を仕事としています。第一線の義肢装具製作者となるのに十数年は要します。早いもので、創業して36年となりました。この間、地域の若者たちが粘り強く努力を重ね、「Think」しながら経験豊富な技術者となって、世界各地の人々にも技術を提供できるほどに成長してきました。５００人にも満たないまちですが、社員の子どもたちも地元の幼稚園や小学校に通い、明るく元気に育っています。

私はこれから、社会保障制度も整っていない途上国の人々や子どもたちの義足や装具をつくってみたいと構想しています。電気や金属技術・プラスチックもない貧困な国でもつくれる義足です。天然の竹や木材を用い、その国の職人が持つ技術を有効にいかすのです。竹細工や工芸などの高い職人文化で、現地の人々の誇りを大切にしながらつくることができるのではないか。今夏、その一歩として、フィリピン・パナイ島の両足欠損の少年のもとで竹の義足が誕生しました。「大地を一人で歩きたい！」その少年の夢を実現できるのは、世界中の人々の文化とやさしさだと思います。

［聞き手・構成：荻原康子、小野光子］